



ハードとソフト

東京農業大学客員教授
西牧 隆壯

どの分野でもハードとソフトのどちらが大切かという議論がある。ソフトのないハードはただの箱だし、ハードのないソフトは単なる妄想に過ぎない。コンクリートから人へと行って華々しく登場した現在の政権も、東日本大震災の経験を踏まえて、コンクリートも人も大切だけどお金がないのでどうするかというところで立ち往生しているように見える。

結局、ハードとソフトをどう組み合わせるかが大事で、どちらかだけというわけにはいかない。

ADCAの会員にとってハードとソフトとどちらが大切か、一時おおいに議論をしたことがあった（ここで会員とは、コンサルタント会社なのか、一人一人のコンサルタントなのかはさておく）。もともとADCA会員は農業土木を得意とする人が中心の集まりで、灌漑排水施設の計画・設計・施工管理ができないと一人前ではないとみなされてきたと思う。つまり、開発途上国の農業基盤整備、ハードこそ大切であった。しかし、1992年のリオの環境サミットで、持続可能な開発、環境と開発の調和が叫ばれたあたり以降、ジェンダー配慮（最初はWIDといった）、貧困削減、住民参加、識字教育、PCM手法など次々とソフトと呼ばれる分野が登場し、農業開発協力も農業・農村開発協力へとシフトしてきた。

今は「開発調査」も、「プロジェクト方式技術協力」も、「個別専門家派遣」も「技術協力プロジェクト」一本になったが、もともとADCAが得意とするのは資金協力を結び付く「開発調査」で、M/PやF/Sのレポート作成の能力が最も重要であった。いくら上手にしゃべれてもレポートが書けなければ一人前ではなかった。レポートの根幹は、構造物の設計図であり水理計算であって、そのおまけとしてIRRの計算に必要な経済分析があり、社会構造の解析があった。今はそのおまけの部分が大きくなって、昔を知るものからすると主客が転倒してきているように思えるかも知れない。

農業・農村開発協力が他の分野の協力と異なっている点は、いくら立派な計画ができ、灌漑施設ができて、農家が実際に作物を栽培し、収穫できなければ意味がないことである。お金でコメは買えるけれど、お金でコメを育てることはできない。

農業・農村開発協力の分野で、ハードかソフトかという時に、作物栽培の重要性が置き去りにされてきた感がある。国内行政の縄張りの影響があるかもしれないが、むしろ農業土木屋が作物栽培を苦手というよりも、学生時代から勉強して来なかったことが原因ではないかと思う。ハードとしての水利施設の建設とそれを動かすソフトとしての水利組合の運営は得意でも、水が来た結果の作物栽培は苦手である。水さえあれば作物ができると考えるのか、作物栽培に水が必要と考えるのかその差は案外大きいかもしれない。

この数年間、ウガンダで陸稲ネリカの普及の仕事に携わってきた。イネの花がこんな風に、こんな順番で咲くのかを初めて知り、ライスイエローモットルで黄色いのか、栄養障害で黄色いのかを畑で識別する方法を教わり、ヘクタール当たりの施肥量の計算方法も相棒の坪井専門家から学んだ。陸稲栽培において一番重要なのは適切な土壌水分の確保であり、とりわけ、幼穂形成期に水がないと白穂ばかりとなり収穫が皆無となることも経験した。まさに六十の手習いとなった。どうして大学の時に作物栽培の勉強しなかったのかと悔やまれるが、農業工学が地域生産環境工学と名前を変えた現在でも大学のカリキュラムはそんなに変わっていないようで、作物栽培は必須科目とは言い難いようである。

最近では農業・農村開発分野のソフト化もバリューチェーン、収穫後処理、マーケット情報処理、さらには地球温暖化への適応策と緩和策と次々とその対象が広がり、言葉を覚えるだけでも大変である。ハードが理工系あるいは自然科学を、ソフトが文化系あるいは社会科学系を意味した時代は我々の分野でも変わろうとしている。しかし、農家からすれば作物を育て、収穫して何ぼ、の世界は変わらないと思う。

ADCA会員各社が新しい時代の農業・農村開発協力に向けてどんな人材を求め、一人一人のコンサルタントが自分の能力のどこをさらに伸ばしていくべきなのか、ハードとソフトの観点から今一度、おおいなる議論を期待したい。